

エコロジー性、 快適性、 経済活性化を両立

ヨーロッパの環境先進国は、エコロジカルな建築において、日本のずっと先を行っているようだ。改修だからできないということはない。むしろ、低エネルギー型の家にするために、改修するのである。

環境先進国の
リフォーム case 1

職人たちのいかつい手が しっかり包み込んだ家。

ヒルドさんの家(ドイツ・バイエルン州ニュルンベルク市)

築53年・粘土レンガ組石造戸建住宅

設計 ベンヤミン・ヴィマー

取材・文/森恵 撮影/森紅 (*を除く)

2006年春先。ハンス・ペーター・ヒルドさんは、1953年に両親が建てた家をいよいよ改築しよう、と思い立つ。うちの中にもっと光を。光熱費をもっと安く。そうだ、大きなサンルームもつこう。

取り壊して新築する、それもひとつの選択肢だ。そのほうが安く済むだろう。工事の面倒も少ないにちがいない。が、この家で暮らしてきてきた90歳のお母さんの気持ちを思うと、それはできない。インターネットで建築家を探した。自分の意向をかたちにしてくれる、経験と能力のある建築家。

まるで新築のような外観。2階ファサードの亜鉛材パイプの手摺と中央の2枚のホウロウ引きガラスパネルに建築家の「ファンタジー」が。



上/ひとつづきの居間・食堂は、改修後ひとまわり広くなった。うちゅうの白い収納家具はかねてからこの家出入りの指物師の仕事。合わせて200㎡ほどにもなるガラスの掃除は、年2回、専門業者に委託する。下左/各室の天井下に取り付けられた換気口から、一定量の、設定された温度の空気が室内に送られる。冬の間も、南面の部屋では暖房せずに過ごせる。下右/1階から2階に通した2本のH形鋼構造柱はコンセント・ボックスの取り付け場所であり、ここに外壁があったことを示す家の歴史の記憶装置ともなっている。ヴィマーさんは、「構造や設備を隠したりする必要はない。ぼくは、それらが外に向かってコミュニケーションできるようにしておいてやる」という。

Photo/Benjamin Wimmer

数多くの情報をたどるなかで、3人の候補があがった。それぞれの事務所を訪ね、じっくり話し合った。そして、ベンヤミン・ヴィマーさんを選んだ。

これまでの家は、上階が東西南面ともに下階より幅1mほどせり出している。そのため、階下の窓は大きいものの、室内に十分な光が入らない。外壁も窓も断熱不十分で、冬の間はうちゅうのドアというドアをびっちり閉めておかないと寒くてたまらないのだった。

ヴィマーさんから出てきた提案の基本コンセプトは、こうだ。

●上下の外壁の凹凸を取り払い、家全体をひとつの四角いコンパクトな箱にする

●鉄骨ポスト&ビーム構造とし、1階東西南面と2階南面は全面ガラスのファサードとする

●高断熱・高気密化

●地中熱・排気熱利用の換気システム、太陽光発電装置、太陽熱温水器の導入

それによって、明るさが屋内を満たし、エネルギー消費量も90パーセントカットできる、という。

それにしても、躯体を支えてきた外壁を取り払ってガラス張りの箱に、とは、なんと大胆な...と思っただのは筆者であって、ヒルドさんは「いや、驚きはしませんでした。でも、『ポスト&ビーム構造』なんて、聞いたこともなかったのだから、それがどんなものなのか、知る必要がありました」と笑った。

ニュルンベルク市内にはそのような工法で建てられた住宅はなかったから、ヴィマーさんが設計した業務施設のひとつを見に行った。柱と梁で躯体を支える軸組構造のポスト&ビーム構造は立面をその広さのままフレキシブルに使える。ファサードいっぱい、窓が大きく

さらに、窓はこの親方に頼みたくいと建築家が言っている建具師の工房まで50キロ車を走らせた。そこで半日を過ごした。工房といっても、大型の組み立て機械がどーんと据えられた、広々とした工場だ。親方は、窓枠の製造から施工までの手順を詳しく説明し、彼が使う地場産木材を見せてくれた。納得。

ヒルドさんは、あっさり当初のサンルーム案を引っ込めた。

建築家はプランを煮詰めながら、この人と思う手工業者に声をかけていった。ヒルドさんが訪ねた窓とドア製造・施工専門の建具師、断熱材を張り壁を塗る左官、2階ファサードの手摺や梯子など金物まわりの指物師、太陽光発電装置や太陽熱温水器の施工業者、換気システム施工業者などが勢揃いした。今回は大工さんの仕事はない。ヴィマーさんは選り出した職人への信頼を誇らしげに語る。

「左官は、この辺り一帯でナンバーワンの老舗の親方だし、窓やドアの建具師はバッシェハウスの研究所の認証も取った、高性能のものをつくる人。どの親方も、みんな大きないかつい手を持っている」ヒルドさんとお母さんは工事中もこの家に住んで、毎朝、親方た